



帝京大学小学校だより

今後10年を見据えて

帝京大学小学校 校長 石井 卓之

11月としては暖かい日差しの差し込む中で行われた学校公開に、多数の保護者にご来校いただきありがとうございました。感染防止のためにオープンスペースや教室外からの参観をお願いするなどのご不便をおかけしたこと、誠に申し訳ございませんでした。学校公開が終わり給食の準備をしていた1年生の教室で、「今日の学校公開は、楽しかったですか。」と聞くと、どの学級の子どもも声を合わせて、「楽しかった。」と笑顔で答えてくれました。

私は港区の校長時代、キッザニアをイメージしながら小学校で体験型のキャリア教育を実施したいと考えていました。その趣旨に賛同してくださった広告会社の方と連携してのべ22社を招き、夏休み各教室等を企業に開放しました。専門家から学ぶ授業は驚きやワクワク感が数多くあり、子どもたちや保護者に大好評でした。帝京大学小学校に着任してそのキャリア教育の進化形を行いたいと考えていましたが、コロナの影響で企業も外部講師派遣を思うように実施できなくなりとても残念でした。

そこで今回の学校公開では、4年生と5年生に企業のCSRを活用した外部講師派遣型ではない授業に取り組んでもらいました。4年生の社会科では、東京ガスとオンラインでつなぎ担当者の方の説明を聞いたり、質問をしたりする授業を行いました。東京ガスも双方向オンラインを活用した授業は初めてのことで、社会科担当と細かな連絡・調整を行いながら進めました。今後はさらに今回実施した授業をブラッシュアップしていき、本校でのオリジナル授業にしていけます。5年生は大人でも正しい知識をもっている人の少ない「薬の飲み方」について、ココカラファインから提供されたキットを活用し、担任が実験を行いながら進めました。どちらの授業形態も、コロナ感染を防ぎながら実施していけるので、今後につながる手応えを感じました。特に4年生の授業は、対面とオンラインの両方で行う、いわゆるハイブリッド型の授業であり、多様な可能性を秘めています。

文部科学省が進めるギガスクールや経済産業省の未来の教室構想など、5G時代を踏まえて一人一人の学びが今まで以上に注目されています。これまで多くの教室では、一人の教師が黒板(電子黒板)を効果的に使いながら授業を進め、学びのスピードが速い子どもは一旦停止を余儀なくされ、ゆっくりと学びたい子どもは必死になって追いつこうとする場面が見られました。私はICT機器を活用することで、子ども自身が自らのペースで学び、「分かる、だから楽しい」という時間を創り出したいと考えています。そのためには、黙々と一人で学ぶだけではなく、必要に応じて友達と教え合う新たな学び方が必要だとも感じています。また、教師の授業スタイルを大きく転換することが必要となり、教師集団の意識改革が重要となります。

今、帝京大学小学校では、今後10年の教育を構想しながら、新しいネットワーク基盤の整備に着手しようとしています。また、タブレット端末の導入によるデジタル教科書、電子ドリルや反転授業の活用方法についても、実際にデモを試しながら検討を進めようとしています。学校のICT環境は一般社会から大きく遅れを取っています。その一方、ICT化を進めることが馴染まない領域も確かにあると感じています。大切なことは、「子ども」を教育の中心に置き、帝京大学小学校のゴールイメージを教職員、保護者が共有していくことです。今あるすばらしい教育環境を活かし、ICTを利活用していくことだと確信しています。私の構想の中に、デジタル通知表があります。公立時代、教育委員会に提案しましたが、区のセキュリティポリシーや予算など越えなければならないハードルが数々あり、時間的な制約から断念しました。例えば体育の授業で、授業前にできなかった運動が友達の応援やアドバイスでできるようになっていく様子が画像や音声で家庭に届けられたら、通知表の「○○ができるようになりました。」という文言より、本当の変容を伝えることができるのではないのでしょうか。

帝京大学小学校の子どもたちが社会で活躍する時代は、どんな時代なのでしょう。多分私たち大人が想像する以上の変革が起きていると思います。その中でも、自分自身のもっている力を最大限に発揮して生き生きと活躍できる力、それは日本を標準とするのではなく、世界を舞台にしているものだと思います。この学校がもっている素晴らしい教育環境をさらに活かし、ゴールイメージを明確にした上で脱平均、一転突破の個性を伸ばせる学校にしていきたいと考えています。